

聴覚障害児を対象としたオノマトペ学習のためのデジタル教材開発 Development of digital teaching materials to learn onomatopoeia for deaf children

東久保 一輝¹⁾
指導教員 吉岡 英樹¹⁾

1) 東京工科大学メディア学部

アブストラクト：日常でも使用されるオノマトペだが、聴覚障害児にとってオノマトペは感覚的な理解が困難である。そのため療育の現場ではオノマトペの学習が行われている。本研究ではより良い療育のために動画を使用したデジタル教材を制作し、聴覚障害児のオノマトペ学習支援を行うことを目的とする。

キーワード：聴覚障害児，療育，オノマトペ

1. はじめに

『日本語オノマトペ辞典』(小野, 2007)には約4500もの擬音語・擬態語が載っており[1]、我々はこれらを始めとした様々なオノマトペを使い分けることで細かなニュアンスを表現している。しかし、聴覚障害児は音を情報として認知することが困難であるため、オノマトペの学習に課題がある。

爲川らの実験によると[2]、健聴児と聴覚障害児の間にはオノマトペの正答率に有意差が見られるとされている。本研究は、動画を活用したデジタル教材を開発し、聴覚障害児のオノマトペ学習に有用であるかを言語聴覚士と共に検証する。

2. 研究手法

制作するデジタル教材の要件についてまとめる。金田一らの分類によるとオノマトペは擬音語、擬声語、擬態語、擬容語、擬情語の5種類に分けられる[3]。その中で擬情語は動画で表現することが難しいため、デモ版は擬情語除く4種類の中から選出する。

日向らは『擬音語・擬態語辞典』で取り上げられている1647語を49の型に分類した[4]。この分類の中で最も数が多かったものが「わくわく」のような同じ音が繰り返されるABAB型であり、約4分の1の419語占めていた。

以上より数が多くまた、発音しやすさの観

点からABAB型の単語に限定する。

また単語に対しての認識のずれを防ぐため動画は対象となるものや動作以外の余計なものが写っていないシンプルでなものを使用する。未就学児の使用も想定しているため、文字はひらがな、カタカナのみを使用する。

3. 検証

療育の現場では現在図1のような教材が使用されている[5]。



図1 ひとりでとっくん60 ようすことば

こちらを参考にデジタル教材のデモ版を作成していく図2はスマートフォンアプリ『Vocagraphy+』[6]を使用し実際に作成したものである。『Vocagraphy+』は吉岡が開発した単語帳アプリである。画像や動画を入れ自分だけの単語帳を簡単に作ることが出来る。

この教材はひとつの単語に対して「複数の映像」、「例文テキスト」、「様子やイメージ」で構成されている。

複数の動画を使用することで、オノマトペを誤解して覚えるリスクを減らす狙いがある。

ひとつの単語に対して状況が違うものなど複数のバリエーションを用意することで、共通する要素を学習し、様々な場面での使い方を覚えると同時に誤用を減らせると考えた。



図2 デジタル教材のデモ版 映像部分

例文テキストはできるだけ簡単な文章を使用し、学習するオノマトペの部分が穴抜けとなっている。



図3 デジタル教材のデモ版 テキスト部分

メモ欄を使用し、そのオノマトペに対する様子やイメージを共有する。しかし、オノマトペは健聴者であってもニュアンスの捉え方に個人差が多いため、全ての人が一致するような内容を書くことが難しい場合がある。そのため辞典を参考にするなどして記述する内容には注意して作成する。

2024年9月9日、これらのデモ版を参考に言語聴覚士3名と協議を行なった。聴覚障害児の言語学習は、年齢別の学習ではなく個人の言語レベルに合わせて学習を行うため、年齢によっては覚えた言葉を日常的に使用する頻度が減るぶん定着がしにくく、必要となるタイミングで出てこないことがある。そのためこういったデジタル教材は有効だという評価をいただいた。

4. 結果

協議の結果、これらデジタル教材は聴覚障害児のオノマトペ学習に有効だという意見が得られた。しかし、雨や風などの様子を表すオノマトペなど実写映像だと表現しにくい単語もあるという課題も見つかった。

5. 展望

今回行った協議を元に引き続きデジタル教材の制作、改善をする。動画はアニメーションと組み合わせること伝わりやすくなるように工夫する。文章の作成は、専門の医療機関であるノーサイドクリニックに依頼し、質の高いものを目指す。また、同機関での実証実験も行う。

オノマトペを理解することで日常生活での表現力の増加及び、漫画や小説などの娯楽メディアをより楽しむことが出来るようになることを期待出来る。

参考文献

- [1] 小野正弘 (2007) 『日本語オノマトペ辞典：擬音語・擬態語 4500』, 小学館。
- [2] 爲川雄二, 出口利定 (1998) 「聴覚障害児における擬音・擬態語の理解(2)」, 『日本特殊教育学会大会発表論文集；第7回 - 第49回』 36, p58-59, 日本特殊教育学会大会準備委員会。
- [3] 浅野鶴子, 金田一春彦 (1978), 『擬音語・擬態語辞典』, 角川書店。
- [4] 日向茂男, 笹目実 (1999) 「語形からみた擬音語・擬態語 2」, 『東京学芸大学紀要第2部門 人文科学』 50, p.189-209, 東京学芸大学。
- [5] こぐま会 (2017) 『ひとりでとっくん 60 ようすことば』, 幼児教育実践研究所。
- [6] 吉岡英樹 (2020) 『Vocagraphy!』, <<https://note.com/vocagraphy/>> 2024年8月20日アクセス。